

函館港弁天地区水深 6.5m 岸壁の完成について

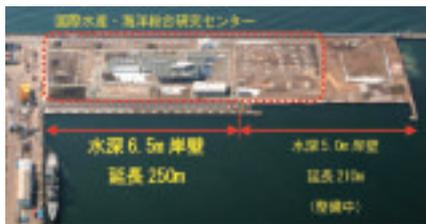
函館開発建設部

1. はじめに

函館港は慢性的に係留施設が不足している状況にあり、荷役岸壁を調査船や練習船などが輻輳利用するため、荷役待ちが生じ岸壁の利用が非効率となっていました。このため、これら港内岸壁を散在係留している調査船等を弁天地区に集約し、荷役岸壁における物流の効率化を図ることを目的として、平成 18 年度から水深 6.5m 岸壁の整備を進めました。

一方、函館市では、更なる地域の活性化を推進すること目的として「函館国際水産・海洋都市構想」を平成 15 年 3 月に策定し、産学官の各種学術機関が集積する「国際水産・海洋総合研究センター（以下、研究センター）」の整備を進めてきました。

平成 26 年 6 月、水深 6.5m 岸壁と研究センターが同時に供用を迎えることとなり、調査船等との一体的な利用により更なる研究の効率化が期待されています。



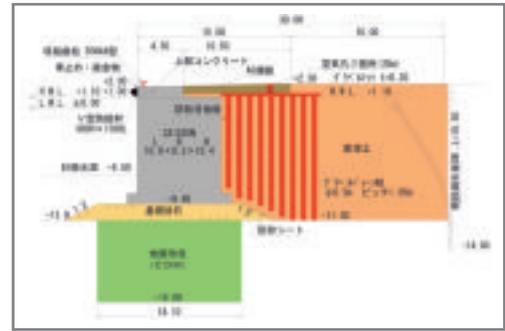
函館港弁天地区の全景

2. 工事概要

弁天地区は、30GT 級から 5,000GT 級の調査・実習船を利用対象とし、水深 6.5m 岸壁 250m と水深 5.0m 岸壁 210m を計画しています。

弁天地区の既存岸壁は、平成 5 年の北海道南西沖地震に伴う背後地盤の液状化により倒壊し、施設の再利用はもとより、撤去すら行えない状況にありました。このため、岸壁法線を 30m 前出しし、堤体をケーソン式構造としました。堤体下の海底地盤には軟弱な粘性土層を有することから地盤改良が必要となり、深層混合処理工法 (CDM) により固化処理を行うこととしました。また、施工中においても既存岸壁の倒壊が懸念されることから、水深 6.5m 岸壁については裏込石を必要としない構造を採用し、水中作業を極力減らすことによる施工中の安全確保に配慮しました。さらに、ケーソン中詰材、裏埋土には港内浚渫等により発生した土砂を活用し環境へ配慮しつつ、裏埋部分はグラベルドレーン工法により液状化対策を行い、平成

26 年 5 月末に水深 6.5m 岸壁は完成しました。



水深 6.5m 岸壁 断面図 (C 部)



CDM 施工状況



グラベルドレーン施工状況

3. 供用開始式典

去る平成 26 年 6 月 2 日、ご来賓や地元関係者など約 250 名に上る方々の出席を賜り、水深 6.5m 岸壁及び研究センターの供用開始式典を函館開発建設部と函館市により共催しました。

式典は研究センターにおいて行われ、高橋はるみ北海道知事をはじめ、前田一男衆議院議員、佐藤英道衆議院議員、高橋みほ衆議院議員、鈴木貴子衆議院議員、横山信一参議院議員にお言葉をいただくとともに、テープカットが行われ、函館市の経済活性化の一助となる施設の供用開始を盛大に祝いました。



供用開始式典テープカットの様子

4. おわりに

函館開発建設部では、引き続き水深 5.0m 岸壁の整備を進め、更なる利便性向上及び地域経済の活性化を図っていきます。